

# 立川寿講じい

講元

小池謙氏 小池 宗和

「お札を貼っておけよ」畑に野菜泥棒が出没すると、御嶽真神札が一役買ってくれます。家屋の戸口や台所には真神札・火難除札が貼つてあり、ご加護をいただいております。当地域(等々力)は世田谷区南部に位置し、玉川神社、満願寺、等々力不動尊があり、神社の欄宜さんは、お御嶽山で神職の修行をつまれています。以前には、大山講、善光寺講、伊勢講とありましたが、現在は解散しています。町内は六つの図子(根・原・宿・南山谷・北山谷)に分かれ、各図子の役員さんが講の活動を多方面にわたり、ご協力を頂き感謝申し上げます。御師は青木勝氏で故 青木正次 儀の後を引き継がれ、大変お世話になっております。講の活動は、毎年、新緑の時期



に参拝をし、近年まで瀧本館に宿泊して、大変お世話になっていました。その後、日帰り参拝となり府中大國魂神社に立ち寄り、御嶽神社参拝後、神代ケヤキ横の駒鳥売店での語らいも楽しみの一つです。そして、年末には、御師

さんが、講中を数日かけ、講員宅を廻られ、ご祈念いただき、深く感謝申し上げます。開講の目的は、五穀豊穡や、家内安全であり、参拝時の御砂を畑に鍬込んだり、太占を参考に致します。昨今、講中信徒・農業従事者の減少や世代の変化等、講のあり方も柔軟な対応を求められるかもしれません。そして、山岳信仰や伝統・目的という面も大切にしていきたいこと、同時に楽しみや観光な面も混在した形態へと定着しているのも事実です。講員や参加者が、次回も参拝したいと想える講になれば、造語ですが観講になればと感じております。結びに御嶽神社・青木御師の益々のご隆盛と、関係各位のご健康を心よりお祈り申し上げます。

## 御岳山の行事

三月	八日	春季大祭(祈念祭)
	中旬	奉納俳句奉告祭
四月	下旬	産安社祭
	二十九日	奉納剣道大会
五月	七日	日の出祭(宵宮)
	八日	日の出祭(神輿渡御)
	十五日	男具那社祭
		大口真神社祭
	六月二十日	神楽と雅楽の一般公開
	二十六日	修行体験講座(一泊)
	二十七日	修行体験講座(二泊)
	三十日	夏越大祓
七月	十九日	峰中修行(日帰り)
九月	四日	カンタンを聴く会
	十一日	修行体験講座(二泊)
	二十日	神楽と雅楽の一般公開
	二十九日	大口真神社祭
		流鏝馬祭
十月	九日	新神楽
	十日	新神楽
十一月	八日	秋季大祭(新嘗祭)
	二十三日	末社祭
十二月	十二日	山岳マラソン
	二十三日	天長祭
	三十一日	大祓
一月	一日	元旦祭
	三日	太占祭
二月	三日	節分祭
	初午	稲荷社祭
	十一日	紀元祭
六月	十一月	第四日曜日 夜かぐら
毎月	八日	月次祭
毎日		日供祭

## 第三十七回武蔵御嶽神社奉納俳句入選作品

選者 金子千侍

特選  
 一席 夜神楽に出を待つすでに神になり 飯能市 森泉 双輪  
 二席 佐保姫の息吹きに目覚む御師の山 八王子市 岡 光子  
 三席 村芝居果て虫達に夜を返し 多摩市 萩生田 芳孝  
 四席 邯鄲や谷越し届く夕祝詞 青梅市 津川 弧羊  
 五席 宿坊の夜はひたすら虫浄土 青梅市 津布久 信雄

秀逸(出句順)  
 節分や社は古き歴史なり 青梅市 原島 康典  
 菜を摘みて匂ふや土の春の畑 八王子市 狩野 亮子  
 蠟梅や香を身にまとひ神参る あきる野市 岩谷 天津子  
 駅長のベルで新緑うごき出す あきる野市 米山 のり子  
 御嶽道蓮華升麻の花に酔ひ 武蔵野市 菊池 尚人  
 空蟬は祈りの形残しけり 横瀬町 鈴木 一郎  
 巫女の舞ふ鈴の音清し十三夜 横浜市 中山 麗子  
 錆鮎の焼ける間山の日照雨かな 横浜市 石原 清澄  
 山の闇揺さぶるごとく虫時雨 多摩市 菱沼 紀子  
 懐に 小犬を入れて 初詣 青梅市 阿部 秋水

佳作(出句順)  
 木々強く春を待ちつつ御嶽山 豊島区 高野 千尋  
 上り来て萌ゆる御嶽に驚きぬ 東村山市 高橋 喜和  
 一山は子らの鈴なり濃山吹 青梅市 関根 康子  
 老鶯に迎へられての御嶽講 青梅市 大越 康次  
 千年の櫻 仰げば 時鳥 羽村市 下田 雪子  
 山陰に御師の茅葺き夏草生ふ 練馬区 酒井 良忠  
 之よりの 三百段や夏の霧 羽村市 岩波 浩吉郎  
 新涼の風と宝物殿に入る 八千代市 西山 春文  
 霊気さえ我等迎える夏御岳 厚木市 橋本 清  
 穂芒を手折りて峽の日を揺らす 多摩市 橋本 絢

応募総数 四二二句  
 田水張り村中みんな生き物に

## 奉納俳句選評

特選一席  
 夜神楽に出を待つすでに神になり 森泉 双輪  
 (評)篝火が激しく燃えあがって神楽殿の闇は回りに押しやられ、舞台上に幻想的な炎色の神代が漂っています。出を待つ人も、もう神になってしまっているのです。夜神楽の神秘的な世界を詠まれた最良の名句です。

特選二席  
 佐保姫の息吹きに目覚む御師の山 岡 光子  
 (評)佐保姫は東の天からやって来る春の女神。ふうい・ふういと佐保姫に息を掛けられ、山も里も、御師のお山も冬の眠りから覚めて、山笑う暖かい春になっていくのです。御嶽山の春の到来がロマンチックに詠まれました。

特選三席  
 村芝居果て虫達に夜を返し 萩生田 芳孝  
 (評)村芝居の照明が夜を明るくしております。さて、芝居が了って人々が去り、明りが消されると、村に真つ暗な夜がやってきて、早速虫時雨の舞台に入れ替るのです。「虫達に夜を返す」とは、機智に富んだ絶妙な表現です。

## 特選四席

邯鄲や谷越し届く夕祝詞 津川 弧羊  
 (評)暮れ泥む御師の庭に、邯鄲の美しい旋律が流れ始めました。そこへ捧げる夕の祝詞が社から翼を持って谷を越え、邯鄲の声と溶け合うのでした。夏の夕暮のハンタジックな交響詩のような一句。

## 特選五席

宿坊の夜はひたすら虫浄土 津布久 信雄  
 (評)秋の御嶽山の宿坊に泊って詠まれた一句でしょう。邯鄲、蟋蟀、馬追などなど、激しく競ういくつもの虫時雨。なんとも凄く虫一色の世界。これぞ虫浄土。秋の夜の清涼感に浸りきった一夜でした。

## 第三十八回 奉納俳句募集要項

- 一、作品は未発表に限る
- 一、受付は指定用紙にて投句箱へとする
- (郵送等直接の受付は致しません)
- 一、締切りは 平成二十三年一月十五日
- 一、発表は 平成二十三年三月中旬